## 「治療的乗馬学習会」のご案内

2012年、JTRAではこの領域を少しでも多くの方々に知っていただくために、学習会を開きます。内容は「治療的乗馬」もしくは「障害者乗馬」とよばれる領域の基礎からの内容、当面2ヶ月に1度の開催予定です。内容は参加者の皆様のご要望も反映させながら進めていきたいと思います。この領域に関心はあるがあまり関連書籍もなくどのような内容なのか知りたい、大学生で卒業研究に取り上げたいのでまず基礎を学びたい、ボランティアで馬の活動に関わっているが理論的な背景を勉強したい、そんな方々にお勧めです。乗馬関係施設が休馬日を設けていることが多い月曜日、お勤め帰りや学校帰りに参加していただくことを考え、月曜日夜に設定しました。話題提供は、本会の理事や会員の他、本領域に詳しい方々にお願いしていく予定です。なお、各地の皆さま、東京近郊にお住まいの方が参加しやすい場所でスタートすることをお許しください。

### 第1回 テーマ：「治療的乗馬」もしくは「障害者乗馬」って何？

内　容：「治療的乗馬」もしくは「障害者乗馬」と呼ばれる領域の概要について、歴史、理論的な背景について映像を用いながら紹介します。
講　師：滝坂信一（JTRA理事長、帝京科学大学）
日　時：平成24年2月20日（月）１８：３０～２０：３０
場　所：新宿区立新宿文化センター第２会議室
（〒160-0022 新宿区新宿6-14-1）
申込み：申込みは下記事項をご記入の上、メール又はFAXでお申込みください。
1. 氏名　2. 所属先名　3. メールアドレス　4. 電話番号
●申込み先　Mail:office@jtranet.jp　Fax:03-3565-6647
準備する資料印刷の都合上、JTRA事務局に2月17日までにお願いします。
参加費：一般500円（資料代）、会員無料
※第2回目以降の日程などは、ホームページ上でお知らせしていきます。

●今後扱う内容（予定）
●馬に乗ることの身体に及ぼす影響と運動機能障害●馬との触れ合いが及ぼす心理的影響●馬という動物を教育に活かす●障害と乗馬というスポーツ・レクリエーション●「治療的乗馬」もしくは「障害者乗馬」のパートナーとなる馬

## NPO 会員へのお誘い

NPO日本治療的乗馬協会は、国内外の治療的乗馬や障害者乗馬にかかわる人々、そして関心を持つ人々の相互交流の機会、さらに関連情報の提供などを通じ、この領域の充実と普及を行うことを目的に設立されました。毎年11月に開催している「治療的乗馬研究集会」による実践や研究成果の報告と協議、ニューズレターやホームページによる情報の提供を行っています。

本協会は、会員会費、企業等からのご寄付や協賛金によって運営されています。趣旨にご賛同の皆様には、ぜひ会員になっていただけますようお誘いいたします。会員になるための手続きにつきましては、ホームページをご覧ください。

特定非営利活動法人
日本治療的乗馬協会

http://jtranet.jp

市販直後調査
平成22年12月～平成23年6月

新発売

ヒアルロン酸ナトリウム架橋体製剤　薬価基準収載

サイビスクディスポ® 関節注2mL
SYNVISC® 2mL　ヒアルロン酸ナトリウム架橋処理ポリマー及び ヒアルロン酸ナトリウム架橋処理ポリマービニルスルホン架橋体関節内注射剤
処方せん医薬品（注意―医師等の処方せんにより使用すること）

■「効能・効果」「用法・用量」
「用法・用量に関連する使用上の注意」
「禁忌を含む使用上の注意」については、
製品添付文書をご参照ください。

販売
TEIJIN 帝人ファーマ株式会社
〒100-8585東京都千代田区霞が関3丁目2番1号
資料請求先 ：帝人ファーマ（株）学術情報部

genzyme
製造販売元
ジェンザイム・ジャパン株式会社
〒107-6337 東京都港区赤坂五丁目3番1号
http://www.genzyme.co.jp/

Synvisc及びサイビスクディスポはGenzyme Corporationの登録商標です。　©Genzyme Japan K.K.2010

SYV013（LT）1012　2010年12月作成


【編集後記】

明けましておめでとうございます。皆様にはどのような新年を迎えられたでしょうか。ずいぶん昔、学生の頃のことですが少し演劇を囓っていたことがありました。顧問をしてくれていた桑原経重という近代演劇史が専門の教授が、「一寸先は闇よ」と事あるごとに私たち学生を前にして言っていました。しかも何とも言えぬ表情で言うのです。求めても説明は一切なしです。「ナニガオコルカナンテワカッタモンジャナイ。ダカラ、イキルッテコトハ、クルシクカナシク、スコシダケオモシロインジャナイカ」そう言いたかったのかなあと思うのです。これは、決して受け身的な生き方を意味していない、そう私は思っています。この一年が皆様にとってどうかよい年でありますように。（滝坂信一／理事長）


特定非営利活動法人
日本治療的乗馬協会

FRDI
*NPO法人日本治療的乗馬協会は、国際障害者乗馬連盟の正会員です。

2012. Jan. 20. Vol.9
http://jtranet.jp


# JTRA Newsletter
## Japan Therapeutic Riding Association


編集・発行：特定非営利活動法人 日本治療的乗馬協会 〒161-0031 東京都新宿区西落合2-6-6 Tel.03-3565-6641

## 2012年 新年のごあいさつ

新年のご挨拶を申し上げます。
昨年は、一般社団法人 日本障害者乗馬協会との共催による研究集会を実施しました。
その内容は、本ニューズレターをご覧いただければおわかりになるように、大変充実したものでした。
日本障害者乗馬協会はもとより、ご協賛、ご後援をいただきました多くの組織・機関の皆様、
そして当日ご参加くださいました皆様に心から感謝申し上げます。
さて、昨年の社団法人 東京乗馬倶楽部創立90年、ドイツ治療的乗馬協会創立40周年、国際障害者乗馬連盟創立30周年、
公益社団法人 全国乗馬倶楽部振興協会創立20周年に続き、今年は財団法人 ハーモニィセンター創立50周年と、
交流およびご支援をいただいている組織にとって記念すべき年を迎えています。
理念と活動を継続することの大切さを強く感じます。心からお祝い申し上げます。
私たちNPOも、関係諸団体とさらに交流を深めてネットワークを形成し、
本領域の健全な発展に息永く貢献していきたいと考えております。
本年の研究集会は11月3・4日にオリンピック記念青少年総合センターで開催いたします。
本年もどうぞ宜しくお願いいたします。

特定非営利活動法人
日本治療的乗馬協会
理事長　滝坂 信一

# 治療的乗馬研究集会2011

大会テーマ

## 「豊かな生活の質に寄与する馬 ― スポーツとレクリエーションに焦点をあてて ―」

■日時：2011年11月5日(土)・6日(日) ■場所：オリンピック記念青少年総合センター ■共催：一般社団法人日本障害者乗馬協会

## 第1日シンポジウムテーマ：パラリンピックにむけて

### 高田 華羊(たかだ かよ)氏

８年前にリハビリのために始めたことが障害者乗馬のきっかけであったが、いろいろな人と知り合えて財産になっている。「大変ね」と言われることがあるが、やりたいことをやりたいようにやっているだけで、楽しいから続けられているし国際大会にでることも当たり前になっている。乗馬でうまくいかなくても仕事に行けば気が紛れるし、仕事がうまくいかないときには乗馬をやることで元気になれる。自分の居場所があるという感じ。小さい頃から自分の障害を受け入れることができなかったが、今は、もう一度生まれ変わっても障害を持って生まれてきたいと思う。

フロアーから「何がそうさせたのか？」の質問に対し、「小さいことを一つ一つ乗り越えることができて、障害が自分にとってマイナスではないと思えるようになった。健常者でも立てない世界の舞台に立てたことで障害があることが人生にとってマイナスではないと思えるようになった」と答えられた。

高田 華羊氏

### 鎮守 美奈(ちんじゅ みな)氏

５回くらい落馬経験があるとのお話に続き、監督の三木氏からアテネの本番の直前に落馬したときは、怖くてリタイヤするのかなと心配したこともあったと追加発言（このような場合、回りはどうしようもない、競技は厳しいもので国際スポーツは一人で立ち向かうだけ、しかし鎮守さんはメンタルに強い）、また鎮守氏の手綱さばきに審判が感動したシーンを目撃し、プロでないと見分けられない「手は揺れているけれども馬は真っ直ぐ歩いてくれている絶妙のコントロール」だったと。不随意運動が全身にみられる鎮守氏の馬の制御術のコツは何かという質問には、「全身」と浅川氏の助け舟が出た。

言葉が不自由なため用意していただいたメールによるメッセージでは、「普段は、競技会当日に練習でやってきたものを出せるように頑張っている。一言で言えば精神修業です。セラピー、競技に限らず、前回よりうまくできると嬉しいしそこをPTの方からほめられたら頑張る気持ちになれる」

鎮守 美奈氏



### 渡辺 廣人(わたなべ ひろと)氏

30歳（1978年）の時に初めて馬に乗るが、動機はセラピーではなく、カウボーイに憧れていたためである。初乗馬では危険だから「乗馬の楽しさを味わわせないで単に乗馬をさせて返そう」という回りの思惑を知ることなく馬にはまる。しかし落馬は数限りなく、骨折も何回か経験し、怖くなってクラブに行けなくなったこともある。このため障害者乗馬が本当に健康のためによいのか疑問を感じることもあったが、知的障害者の方が乗馬後、「表情が変わる」ことを見て馬の力を知らされる。

1994年、グロスターの大会を見学した時、障害者乗馬が全くのスポーツと知りチャレンジを決意し、本を買いこみ翻訳などにも取り組む。

1998年のロス大会で転落してしまうが、競技のクラス分けが１クラス上のグレード３のランクで戦っていたためであった（と後に判明：後述）。国際クラシファイヤーのクリスティーヌさんの講習会で「松葉杖で歩くことはできるけれど腰が全く使えていないこと」を初めて指摘され落馬のことなども納得できる。明石乗馬協会では前田先生を中心にクラシファイヤーが育成されており外国に行かないでクラス分けができる環境も大きな力になっていると報告された。クラシファイヤーになれるのは医師とPTだけであり、その他の人はアドバイザーであること、現在５つのグレードがあることなどもお話いただいた。

渡辺 廣人氏

### 浅川 信正(あさかわ のぶまさ)氏

物心ついた頃から馬が好きで15歳の頃から乗馬を始めるが、50歳でのバイク事故により胸から下が麻痺し車椅子生活となる。事故後ドクターヘリによる搬送から８日目の手術、３ヶ月の寝たきりとその後のリハビリという具体的で壮絶な、しかしユーモアを交えたお話は迫力があり引きつけられた。

また、障害者乗馬の６年間に渡る世界行脚での人々の出会いもスライドを交えて飽きさせないものであった。

「神様からの贈り物」として障害を受け止め、世界をめざすたくましさに感動させられた。

浅川 信正氏

### 三木 則夫(みき のりお)氏

シドニー、アテネ、北京のパラリンピックにおいて日本チームの監督を務める。私が引っ張ってきたというよりは、選手がいたからやってこられたということ，日本障害者スポーツ協会に加入し世界への窓が開かれ世界のスポーツの流れに乗れたことなどを冒頭に話された。

クラス分けについて現在は、精緻なクラス分けがされており「（前述の渡辺さんのような）不公平なクラス分けによる落馬のような悲惨な状況はなくなった」とコメントされた。視覚障害での判断が困難な場合、（「見えにくい」選手が勝ちたいため「見えない」と申告するような場合）「見えないならアイマスクをして下さい」という厳しいやりとりがみられるとのことである。

シドニー大会を最後に貸与馬がなくなり、自前で馬の調達が課題となったことで選手に大会参加での財政的、時間的にハードな条件となったことが報告された。日本では練習環境や資金的援助など先進諸外国に比べると遅れており、外国人から日本の現状を訪ねられると返答に窮する旨が語られた。

選手団の壮行会での小泉首相（当時）と鎮守さんのツーショットや大会の様子をスライドで伝えていただいた。

三木 則夫氏

### 最後に

本シンポジウムでの感想を一言でいえば、選手の一人ひとり全く異なる障害に対する取り組み姿勢が、障害を意識しないというより楽しんでさえおられるという驚きです。また三木監督を中心によくまとまった日本の障害者馬術チームに希望と勇気をいただきました。パラリンピックにむけた道のりは大変と思いますが厳しい環境を乗り越えて頑張っていただきたいと思います。

文責・柳迫康夫氏（シンポジウムコーディネーター：東京農業大学）

## 治療的乗馬研究集会2011 第2日午前 実践・研究報告

### 肢体不自由特別支援学校における児童・生徒と『うま』の活動

**金子 淳子氏**（新宿区立新宿養護学校）

年１・２回の校外学習でのポニーとの関わりについて、事前学習と実際の活動の様子を発表された。ポニーがどういう動物かイメージして出かけ、楽しい時間を過ごす中で、主体的な行動・身体の変化・コミュニケーションの広がり等が見られるとのことであった。

また、学校で乗馬シュミレーターを使うことで股関節の可動性・内転筋の柔軟性・上体のバランス能力等が高まった例が紹介され、今後の学習活動での活用方法と効果が期待される。

金子 淳子氏

### ホースセラピーから考える木曽馬の利活用

**中川 剛氏**（財団法人開田高原振興公社 木曽馬乗馬センター）

木曽馬だからこそできること・環境を活かしてできることを模索する中での、特別支援学校の授業の取り組み・ホースセラピーボランティアの育成活動（月１回の勉強会）・古式馬術（騎馬打毬）復元と導入について発表された。これらの取り組みを地域のニーズと連携させて、木曽馬がより多くの場面で活躍できるようにするためには、各分野の専門性の向上・実践に係る知識・技能の評価法の検討等が課題となることが示唆された。

中川 剛氏

### はばたき共育プログラム
～ポニーとのふれあいをとおした心とからだの教育の推進～

**小松 文氏**（埼玉県立深谷はばたき特別支援学校）

４月に開校したばかりの知的障害特別支援学校で教育活動の重点の一つとしてポニーの飼育を行い、児童生徒の心の安定と教員間の連携が見られるようになってきたという発表であった。いつもポニーがいることのよさを活かす・児童生徒の意識の高まりや成功体験を大切にする・ねらいを明確にして具体的な活動を決めだし総合的な実践につなげる・無理せず安全に・色々なアドバイスを聞いて進めるなど、今後に向けての意見が出された。

小松 文氏

文責・安川千壽子氏（座長：長野県安曇養護学校）

## 治療的乗馬研究集会2011 第2日午後 実践・研究報告

### 意欲の向上を目指す乗馬プログラム
－ウマキャンプの事例から－

**峯﨑 友香里氏**（馬の学校 代表）

発表者である峯﨑氏は、代表である馬の学校主催のウマキャンプを長年実施されてこられた。今回は参加者の意欲に焦点をあてウマキャンプ参加者のべ64名の乗馬カードとスタッフの観察記録から乗馬活動の形態別による意欲向上過程について報告された。先生が配慮された「無理やりではなく意欲を育てる」という点が乗馬プログラムをすすめる上で大切であることを強調されていた。

峯﨑 友香里氏

### 被災した子どもへのポニーボランティア派遣

**江端 彩乃氏・深野 聡氏**（渋谷区立代々木ポニー公園）

今春の東日本大震災により被災された方々や子どもたちの心のケアにポニーをボランティアで派遣した活動についての報告でした。普通ではない状況下での乗馬体験を行い、たいへん貴重なご報告であった。被災者との別れ際に何と言っていいか、大変つらかったという言葉が印象的であった。

江端 彩乃氏



### 帝京科学大学での障がい者乗馬への取り組み

**久保 慧理香氏**（帝京科学大学）

2004年からはじまった帝京科学大学での障がい者乗馬会についての活動組織、活動実績、特色が細かく説明された。馬もなく、馬場もない状況からはじまり2009年にやっと3頭の馬、馬場、厩舎が設置され新しい展開になったものの重度の乗り手への対応に今後の大きな課題があげられていた。

文責・小川家資氏（座長：帝京科学大学）

久保 慧理香氏

熱心に行われた協議

## 研究集会に参加して－馬と私－（寄稿）

**細川 裕史氏**（東京障害乗馬協会会員）

私は、年に一度の日本治療的乗馬協会の研究集会に時間がある限り参加というか拝聴させてもらっています。恥ずかしながら大した問題意識を持って参加しているのではなく、僕が所属する東京障害者乗馬協会（以下、略称 TADER）の渡辺廣人会長が孤軍奮闘（？）治療的乗馬界隈に貢献しようとしているのなら、研究集会の会場になっているオリンピックセンターは僕の庵の近くでもありますから会長の応援がてら･･･くらいの感じです。

TADER自体は20年近くの歴史があるそうですが、私自身はこの会にお世話になるようになって早12～3年になります。

当初は、馬に跨るのがやっとの状態で、一人で馬を歩かせ走らせるなんて、とうていできないだろうな･･･という状態でした。だから、馬担当のリーダーががっちり馬を導き、両サイドにはサイドウォーカーもがっちり従えてという、治療的乗馬シーンでもよく見受けられるフォーメーションで乗馬を楽しんでいたものです。それでも10年以上乗り続けていると、それなりに馬上の姿は様になってくるようです。

ほらっ！写真のようにね。この写真は、今年馬事公苑で行われた第57回東京馬術大会での一コマです。実際は、私の技術力の未熟さから当日まともに停止が出来なくて、とんでもない演技をしたわけですが…（とりあえず、写真では、そこまでバレませんね）。こんな晴れの舞台で失態を演じられる事自体、それはそれで楽しいことだと思ったものです。

私が競技会に出場する際は＜グレード１a＞という障害程度のカテゴリでは一番重度なクラスであるため、速歩までは求められないのですが･･･。なにも競技会のために乗馬の練習しているわけでもなく、乗馬が上達したくて目標設定の１つの目安として競技会にも出ている感じですので、馬に乗ればやっぱり走りたい（速歩くらいしたい）。そんな感じで自分の体力顧みず走ってしまい、乗馬後はいつもバテバテな日々をおくっております。

最後に、写真で私が跨っている馬、小鹿毛のご紹介で終わりたく思います。小鹿毛は和種馬の範疇の馬であり、首の短さや体型から荷駄馬の血統が濃く出ています。だから、本当の意味では小鹿毛で馬場を回っても、馬場的には見栄えがしない点はあります。ただ、それでも、僕がカテゴライズされている＜グレード１a＞では常歩で演技を競うものですから、見かけほどハンデにはならない訳です。現に１度はチャンピオンシップの＜グレード１a＞の課題で60％を取ったことありますからね。この数字がどれほどの意味を持っているのか？･･･馬術を経験した方なら、障害者馬術の世界をご存じの方ならなおさら説明する必要も無いでしょう。私の（健常者から比べるとかなりイレギュラーな）指示で、それを理解しそれに従い正確に動いてくれる…とても利口な頭脳を持っている馬なのです。

そんな馬を提供して下さっている紅葉台木曽馬牧場と、そしてTADERをサポートしてくれているみなさまに甘えっぱなしで、今の私は乗馬を楽しめております。

# ポニーのいる学校 ［第３回］

埼玉県立深谷はばたき特別支援学校 教諭

**小松　文**

調馬索による運動

本校の第一回目の文化祭が１１月１９日（土）に行われました。文化祭の名前は『メロンフェスティバル』です。もちろん本校の子どもたちが大好きなポニーのメロンが名前の由来です。当日は冷たい雨が降っていましたが、たくさんの方がお越しになり、子どもたちのステージ発表や作品展示、作業学習の製品販売等で賑わいました。

「メロンふれ合いコーナー」が設けられ、メロンににんじんをあげたりふれたりできる企画も、バスデッキの下で雨をよけて無事に行われました。

普段はメロンを柵の外から眺めていることに慣れている子どもたちですので、少し遠めに立って恐る恐るにんじんをあげようとする場面も見られました。メロンはにんじんが早く欲しくて突進しそうなことが何度もありました。そんなメロンに近づくことを怖がる子どもたちは、近くに設置した「メロンぬりえ・お絵かきコーナー」で熱心にクレヨンや色鉛筆を動かしていました。

メロンぬりえ・お絵かきコーナー

さて、私たちはもっと馬のことを学ぶ必要があると感じていましたが、渋谷区立代々木ポニー公園でその機会をいただくことができ、教員が研修に伺っています。

そこで学んだこと、今後活かしていきたいことを挙げてみます。

・体調の変化がわかるように検温する
・リラックスと緊張の場を分ける
・基本的な世話の方法…顔拭きや蹄の手入れ、ブラッシング等
・引き馬と調馬索の方法
・飼育環境について
・子どもが馬や人に合わせて歩くための指導方法　…など

基本から丁寧に教わることができ、また、実際の指導にすぐにでも活かすことができるような助言をいただくこともできました。蹄洗場もなく引き手をいつも木や遊具やテラスにつないでいるようなメロンに対して、ポニー公園のように設備の整ったところと同様に行うのは難しいことが多く、今後、施設を改善したり私たちが慣れたりしていく必要性を改めて感じました。冬休みには、ポニー公園に行った教員が中心となってメロンの世話にかかわる教員向けの研修を実施することにしています。

さらに、ポニー公園では三肢まひのお子さんの引き馬乗馬の様子を見る機会があり、そのお父さん（理学療法士のお仕事をしているとお聞きしました）のお話を伺うこともできました。楽しみなことができた、始めたばかりの頃は便秘が改善されていた、わずか１５分程ではあるが運動になり疲れるようで眠るようになった、乗った後は背筋が伸びて姿勢がよくなる、普段はないようなお尻からの刺激を感じることができる等、お子さんの様子をお話してくださいました。背筋の伸びた良い姿勢は長時間続くわけではない、ともおっしゃっていましたが、たとえ短時間であっても良い姿勢の経験をすることは大切であると考えました。

ポニー公園での研修

さて、研究集会には、例年、一人で参加してきましたが、今年11月にはたくさんの同僚と一緒に参加することができました。発表内容について意見交換をしたりメロンについて参加者の方々からの意見を一緒に拝聴したりすることができ、楽しい二日間でした。
メロンや児童生徒の充実した様子を報告できるよう、皆でがんばっていきたいと思います。

雨の中行ったふれあい



# ドイツ乗馬（施設）レポート
## ［第２回］～ドイツ州立乗馬学校～

在・ドイツ NRW 州ケンペン

**佐久川 未来**

＜経歴＞　東京都立川市生まれ / 日本獣医畜産大学 畜産学科（現・日本獣医生命科学大学）
ヤマハつま恋乗馬クラブ勤務 / ドイツ国際平和村にて１年間の研修
LVR Fachschule des Sozialwesens 卒 /Heilerziehungspflegerin（障害児者教育・介護士）の資格取得
デュッセルドルフの特別支援学校にて、インテグレーションヘルパーとして勤務乗馬トレーナー（アマチュア）資格取得を目指し、Stall Rögels にて研修中

ドイツ乗馬（施設）レポート第１回の前号でご紹介したように、“馬”はドイツにおいて非常に身近な動物です。ドイツ馬術連盟の調べによると、推定160～170万人（2001・2002年調査）が乗馬・馬車・軽乗のいずれかに携わっており、馬術連盟に加盟している馬事施設は3,916と年々増加傾向にあるとのことです。また、国内にいるポニーや馬は合わせて約100万頭いるといわれています。

そこでレポート第２回目は、そんな乗馬大国ドイツに数ある乗馬学校（乗馬クラブ）の中でも、特に歴史のある州立乗馬学校にスポットを当ててみたいと思います。16連邦州からなるドイツには、各州に馬術連盟および州立乗馬学校（各１ヶ所～数ヶ所）が置かれています。通常の乗馬レッスンはもとより、プロ・アマチュアトレーナーやグルーム資格試験をはじめマイスター試験、乗用馬の繁殖育成などが行われており、州立学校は乗馬界において大きな役割を担っています。

今回は、その中でも2011年３月に私が講習会で訪れたラインランド州立乗馬・馬車学校をご紹介します。

メインビルディング

屋外馬場

### ラインランド州立乗馬・馬車学校

ノルドラインウェストファーレン州に３校ある乗馬学校のうちの１つ、ラインランド州立乗馬・馬車学校はドイツ西部デユッセルドルフに程近いランゲンフェルドに位置します。1959年にヴュルフラートに設立され、2001年にランゲンフェルトに拠点を移しました。まだ新しいその施設には、132頭収容できる厩舎、室内馬場２つ、屋外馬場４つ、丸馬場、600メートルの走路、クロスカントリーコースが完備されています。この恵まれた環境とマイスター資格を所有する５人の職員のもと、人馬ともに多種多様なトレーニングを積むことができます。通常の乗馬レッスンをはじめ、下記のような講習会やセミナーが通年にわたって開催されています。

１. 初心者・中級者・上級者それぞれのレベルにあった講習会、馬術及び馬車認定試験の実施
２. Sクラスまでの馬場・障害・総合のトレーニング
３. トレーナーC・B・A、ドイツ馬連認定のグルーム、スポーツアシスタント、Berittführer（外乗先導者）の講習と終了試験
４. セミナーその他
５. 中高生向けの講習会（長期休暇中）
６. プロライダー・アマチュアトレーナーのための講習
７. 馬のプロを目指す職業訓練生の中間・卒業試験
８. その他（審判講習会など）

クロスカントリーコース

屋内馬場での様子

厩舎内部

第一室内馬場（25×75m）

これらの乗馬レッスンや各種講習会では、現在、調教の行き届いた約４０頭のポニーや馬が活躍しています。

ちなみに、私の参加した講習会は３のスポーツアシスタント（トレーナーアシスタント）の資格取得を目的としたもので、４日間の講習と認定試験で構成されていました。遠方からの参加者は、この期間中乗馬学校の敷地内にある宿泊施設や食堂を利用することができます。その名のとおり、このトレーナーアシスタントとは乗馬トレーナーの補佐役です。初級・中級者のための座りのレッスン（調馬索）や初心者の手入れ・馬装時の指導などの実践。理論の方では、一般的な馬学はもちろんのこと、“事故防止と保険”、“乗馬レッスンの組み立て方”等、ドイツ馬術連盟の乗馬教本に基いた充実した授業内容でした。

州立学校で資格を取得した人材の多くは、そこで学んだ知識・技術を、個人経営の乗馬学校で今度は指導者として生徒に伝えていくのです。

画像はラインラント州立乗馬・馬車学校ホームページから許可を得て転載
参考：www.landesreitschule.de